

- ⑥ 職歴……大学職員（二二歳、二年）、大学助手（三一歳、二年）、大学講師（三三歳、四年）、現職（三七歳から）。
- ⑦ 現地滞在経験……カンボジア（王立ブノンペン大学人文社会学部・留学、二八歳、二年間）。
- ⑧ 研究手法……資料の収集や作家、出版社、書籍販売者、読者など文学をめぐる人々へのインタビューなどは、フィールドで行うことが多い。
- ⑨ 所属学会……東南アジア学会。
- ⑩ 研究上の画期……冷戦が終結したことでカンボジアに和平の兆しが訪れ、カンボジアへの一般的な渡航が可能になったこと。
- ⑪ 推薦図書……高樹のぶ子編『天国の風…アジア短編ベスト・セレクトション』（新潮社、二〇一一年）。
- ⑫ 推薦する映画作品……『初恋のきた道』（チャン・イーモウ監督、二〇〇〇年、中国）。

【タイ】 新しいヒロイン像 ——日本・韓国表象とともに

平松秀樹

一〇年ほど前、チュラーロンコーン大学のある比較文学セミナーにてタイ映画についての議論となり、世界に対してタイの誇る二大映画ジャンルは「ホラー」と「ガトウイー（ニューハーフ）」ものであるという提議があり、参加者全員の首肯を得た。^{*2}

現在でもこの二ジャンルに属する映画は盛況であるが、加えて近年では『ブンミおじさんの森』（二〇一〇）のよきなカンヌで賞をとる「世界的」作品もでてきた。しかしながら、タイ本国での評価はそれほど芳しくなく、影響力

は極めて小さい。小論では、タイ国内で話題を呼び、社会に少なからぬインパクトを与えた近年のタイ映画を中心に扱い、その傾向を抽出したい。

『スカイトレインが逢いに来る』

まず取り上げるべきは、都会風の颯爽とした映画スタイルで話題を呼んだ『スカイトレインが逢いに来る』（二〇〇九）（日本公開時のタイトルは『BTS- Bangkok Traffic (Love) Story』、以下『スカイトレイン』と略記）である。大卒（会計専攻）で企業に勤める都会女性のライフスタイルを描き、幅広い階層の人々の支持を得た。主人公は三〇歳の独身の女性で、容姿は月並みであるが英語も話せ知識教養もあり、バンコクの日系企業に勤める。親ではなく個人所有のトヨタVIOSを運転し、グッチのポストンやゴヤールのサンルイ、ルイ・ヴィトンのスピーディといったバックを携帯する（写真）。こういったジャンルの映画の設定にありがちなベンツやBMW車、あるいはエルメスのバーキンではないところが一つのポイントであろう。主人公を真似て同じグッチのバックを素早く購入した者も少なからずいる。その他レイバンのサングラス等も都会生活の効果的アイテムとして強調され登場する。こうしたものは現実の一般の人にも手の届く範囲内のファッション・アイテムとなっているがゆえに歓迎されるのであろう（た

だし、バンコクをはじめとする都会での、という限定詞が必要かもしれない）。

一見充足した生活に秘められていた欠如感が、親友の結婚を機に、恋人のいない寂しさとして一気に増幅する。中国系の家庭で、母親による「男にうつつをぬかすと家が潰れる」との教えを受けて育った主人公は、自分から男性に声を掛けることなど到底できないおくてで、当然ボーイフレンドを持った経験もない。中学の頃、アイドル歌手（ロックバンド・ヌーヴォー）の映るテレビを前に体を震わせ、前述のように母親に叱咤されるシーンは、かつて「ジュリー」と叫んだ樹木希林を彷彿させ日本の視聴者にも滑稽であろう。あとで母親からそんなことを言った覚えはないと言われ、「女性から告白するのは、はしたない」とする母の教えをずっと信じて守ってきた一七年間は何んであったのかというオチが入るのであるが。

伝統的にタイの女性が、「女の真価は、ケーオ」（寶石、クリスタル）のような処女性であり、女の美德は感情・愛を出さず、愛されるようにすること」と唱えた古典詩人スントンプーの「女性訓」の影響下に置かれており、その教えは日本における「女大学」の如く形を変え現代社会においてもなお再生産され続けていると筆者はかつて論じたことがあるが（平松二〇〇八a・二〇〇八b）、この「シェーマ」（図式）は本映画にも有効であろうか。あるいは主人

公の価値観を中国系の家庭という「特殊性」に帰す論者もいるであろうか。作品中ではジェネレーションギャップも垣間見せ、対照的に男性に積極的で複数のギックを持つ^{*1}近所の後輩を登場させ、主人公が疎ましくも内心では羨ましく感じるといった姿も描かれている。

泥酔して愛車をぶつけ壊してしまったことで、タクシー等乗り継いで通勤することになるのだが、そこからスカイトレイン（高架電車^{*2}）を舞台にして素敵な男性と近づきになるといふ話が展開していく。この映画の後景画像は美しい。BTS（Bangkok Mass Transit System）一〇周年を記念して作られたこの映画は、当然そのスカイトレインの映像をうまく取り入れているが、同時にコスモポリス的



写真 『スカイトレインが逢いに来る』劇場ポスター

な近代都市バンコクの魅力を遺憾なく映している。そこにはこれまでタイ映画から連想されてきたような「泥臭さ」を微塵も感じさせない^{*3}。管見によれば、一九九九年一二月のこのBTS開通を機に、特に周辺地域における社会・文化的土壌が大いに変わった。髪型、服装ともモダンな都会的センスとなり、男性の靴も（ビーチ）サンダルからスニーカーへと模様替えしていった。「泥臭さ」から洗練された都会的文化へと変容し、二〇〇〇年以降に起こった環境変化の帰着として「日本現代文学を都市ファッションとして受容した若者たち」が「ムラカミハルキの翻訳本をファッションの一部のように持ち歩く」といった状況が誕生した舞台も（平松二〇一・五七）、まさにBTSスカイトレインである。

ともあれ、素敵な男性との出逢いが都会の生活に疲れたタイ版「OL」（サオ・オフィス）にとつてのバンコクの情景を一変させる。それまでの灰色でつまらない出勤風景、最悪の通勤地獄が、渋滞にも鷹揚、クローン（運河）を走る水上バス（渋滞を避けるために利用されるが臭く、暑く、危険で有名）の苦難もどこへやら、タクシーの運転手にまで優しい言葉をかけ、バイクタクシーの後部座席でさえも笑顔を見せるバンコク生活が幕開けした。さしてぱっとしない普通の女性でも素敵な男性と恋ができる、と多くの都会女性を勇気付け、「そこにある日常」で「だれ

かと素敵な恋に落ちる」可能性が大きな反響を呼んだ。

冒頭に挙げた二大ジャンル以外では、これまでのタイ映画はどちらかというと田舎風の稲穂の香りがする社会派映画か、派手でオーヴァーな感のする「ナムナオ」(腐った水)と評されるメロドラマが目立っていたが、都会風のしつとりとした大人のロマンティック・コメディが出現したのである。タイの映画界で一時代を築く新風となるであろうか。

『1110 + 独身 on Sale』

『1110はイケてる』

『アンニョン！ 君の名は』

続いて『1110 + 独身 on Sale』『1110はイケてる』(ともに二〇一〇)に触れたい。いずれも有名女優を起用し、都会で働く三〇代前半の独身女性を主人公に据えたロマンティック・コメディであり、『スカイトレイン』路線を踏襲するものであるといえよう。七年待ち続けた挙句恋人に捨てられ(前者)、あるいは結婚を迫るも煮え切らない浮気症の男(パイロット)に断られ(後者)、仕事の充実感とは裏腹の欠如感を感じる。そうしたところ、年下の男性によるアプローチを受け、年齢差もあるので躊躇いながらも、やがては距離を縮めていくのである。ただし、相手が年下という以外にも、両作品ともに主人公はアーティス

ティックな仕事(写真家、イベント・オーガナイザー)をしており、『スカイトレイン』が無名女優を抜擢し、かつ役柄もより普通の会社に勤める一般人に近い設定であるのとは相違する。

ところで、これらの映画中の日本(人)表象は注目にする。『スカイトレイン』では日系会社(ソーラー・セル販売)での日本人上司との毎朝九時の社内体操がカリカチュアライズされて描かれている。『1110 + 独身 on Sale』で主人公が振られたあとに次々と闇雲に行われるお見合いデートの場は必ず日本食レストランである。しかしここでも、日本イメージはもはやプラスではなく滑稽さを醸し出す舞台装置として使用されている。近年タイでは、たとえば美容院での髪型の注文ひとつとってみても「pop風はpop風ほどファッショナブルではなくなってしまうが、映画にもそれが反映しており、「韓国」がおしゃれなイメージを喚起する「背景」として現れる傾向がみられる。例えば、ホラー映画の『フェイト(双生児)』(二〇〇七)でも、韓国という「場」の設定が殆ど意味を持つことなく作品に組み込まれているが、極めつけは『アンニョン！ 君の名は』(二〇一〇)であろう。

「コーヒープリンス」やヨン様の足跡を追う韓流ファンの一人数の女性がひょんなことからツアーからはぐれたタイ人男性と知り合うドタバタ劇は、まさに世代を問わずタ

イ人好みのラブコメディである。軽快なインディーズの音楽に乗った快活なテンポのストーリー進行は視聴者を飽きさせず、韓国を舞台にした相乗効果で二〇一〇年度のタイ映画興行収入一位に輝いた。^{*10}主人公は購買力をつけた近年のタイ人女性の一変化であろうか。Bangkok 風の美容整形のため韓国に行こうといった書籍も本屋に並んでいるが、タイ人にとってヴィザのいらぬ韓国はもとより、日本の大阪城やはたまたパリのルイ・ヴィトン本店においても最近タイ語が飛び交っている。海外へのツアーや個人旅行もすでに普通のこととなりつつある。

さて作品は、自分勝手なタイ人男に振り回されながらも放っておけず、やがてスウィートな感じになってしまう、という現実のタイ人学生カップルなどにも多く見られるわかりやすい展開であるが、主人公はまだよく知らない男性主人公とともに屋台で焼酎を飲んでへべれけになり、うかつにも知らぬ間にホテルに同泊してしまう。これは女性がいPROを飲んで酔い潰れた挙句に素敵な男性に介抱されるといった韓国映画・ドラマのお決まりパターンがいつの間にかタイ映画に定着した結果であろうか。もつとも、『アンニョン！ 君の名は』で出逢う男性は、韓国映画や『スカイトレイン』でのような素敵な男性というよりも、いい加減な男という設定であるが。

『スカイトレイン』や『三〇はイケてる』でも描かれて

いるが、主人公級の女性がこのように正体がなくなるまで泥酔して嘔吐するシーンは、以前のタイ映画ではあまり出てこなかった光景である。^{*11}映画作成側も主人公の泥酔を敢えて組み込んでいる節があり、そこにもはやネガティブな感はず、社会的に忌避する必要もなくなったと見るこ
とができるであろうか。確かに現実でも、アヴェニューといわれる新興のレストラン・ショッピング街界隈で一般のカップルや「OL」女性グループがワインに興じる様子が恒例になりつつあるのが「最新の文化環境」といえるであろうか。ただしこの場合のアイテムはワインあるいはカクテル（まれにテキーラ）であって、日本と違い女性グループだけでビールを囲む姿は殆どみかけないが。

『天地果てるまで』

『ファームアンの洞窟』

『チャン・ダーラー 前編』

『七年七色の恋』

以上の作品とは対照的に社会派の濃厚な作風で、文学の名作を元にした映画群がある。『天地果てるまで』（二〇一〇）、『ファームアンの洞窟』（二〇一一）、『チャン・ダーラー 前編』（二〇一二）で、活躍が期待される同一監督の作品で事前に雑誌やテレビ等で多く取り上げられていたものの、筆者が観に行ったときはいずれも観客席が閑散

としていた。個人的感想では著名な文学者マラーイ・チューピニットを原作者に持つ『天地果てるまで』が内容・完成度とも随一であるが、本稿ではその批評が目的ではないのでタイトルに触れるだけとする。

『ファームアンの洞窟』は黒沢映画『羅生門』のククリット・プラモートによる翻案を元にしており、舞台は北タイに置き換えられている。羅生門ならぬ洞窟中（撮影はチェンマイのウモン寺）の老人役として、ここしばらく映画で演じることのなかった歌手・俳優・映画監督のポンパット・ワチラバンチョンが出てきて注目を浴びた。北タイの「藪の中」で発生した殺人に対するそれぞれの証言に触れて「我々は皆各々が国家の英雄などと思つとるが、（いずれの側も）ちっぽけで、臆病で、気が許せぬ」云々と語るのとは意味深長である。政治紛争を揶揄しているのではとの解釈も成り立つ。赤シャツ組と黄シャツ組との紛争はバンコクの国際空港が閉鎖されるなどして私たち日本人の記憶にも新しいであろう。『チャン・ダーラー』も原作は官能的と言われる文学の名作である。作品中日本人が主人公の妹役で登場するのに注目すべき^{*12}。

最後に、『七年七色の恋』（二〇一二）について触れておくことも必要であろう。短編三作品のオムニバス映画であるが、フェイスブック上の「絆」を現実のものより大事にし、自身の投稿ビデオの反応に一喜一憂し、やがてはそれ

に振り回され現実の彼女に愛想を尽かされ振られてしまう高校生の話で始まる。タイでのフェイスブックの利用率は実質世界一とも囁かれ、その開始も日本よりも遥かに早かった。直近の事例では、アメリカ副大統領候補が真似することで日本でも漸く取り上げられ話題となったK-pop「ガムナン（江南）スタイル」も、オリジナルがリリースされた週には既に、タイではフェイスブックを通じていち早く大きな話題となり、踊りを真似する者が続出する「社会現象」が起きた。また、大学での連絡事項も大抵はまずフェイスブックを通じて伝わってくるなど、当地では既にライフスタイルの必須アイテムになっている。背景にこのような事情を有するソーシャルネットワークではあるが、映画では利便性の範囲を大きく踏み超えて依存症となり、逆にコントロールされてしまう若者の状況に警鐘を鳴らしているのである。

『七年七色の恋』の掉尾を飾るのは文字通りK-popの代表的グループの一つ2PMに属するタイ人メンバーのニクン（タイでは本名でニイチャクンと呼ばれる）が登場する作品である。今回は平凡な四〇過ぎの女性が日常の公園でのマラソン練習を通してニイチャクン扮する美男の若者と出逢い恋人関係に陥そうになったといった設定で、視聴者は『スカイトレイン』以上に勇気を得るのか、それともK-pop かつ先行する映画の「旨み」を融合したようないさ

さか欲張り過ぎのセッティングに現実離れた興醒めを覚えるだろうか。いずれにせよロマンティック・コメディの隆盛とともに、K-pop 風あるいは「韓国」が格好良い「おしゃれアイテム」としてタイ映画で使われるのは、今後とも暫くは続くように思われる。^{*13}

●注

*1 タイ語のこの言葉は日本語の「おかま」と同様、差別的意味を含んでいるので、使用には注意が必要とされる。

*2 タイでのホラー映画の盛況については四方田「怪奇映画天国アジア」に詳しい。「ガトゥーイ」に関しては、『アタック・ナンバーハーフ』(二〇〇〇)が日本でも上演され話題となった。またバタヤでの国際ニューハーフコンテスト(Miss International Queen)は、はるかな愛が優勝して日本でも知名度が上がっている。

*3 ちなみに主演女優のクリス・ホーワンはほぼ無名に近い元インターナショナルスクールのダンスの先生(兼モデル)であったが、この映画によって一躍時の人となり、トヨタをはじめとする多くの企業に抜擢され一時期「CMの女王」の観を呈した。また主演男優には『絵の裏』(二〇〇一)で日本でもお馴染みのケン・ティラーデットを配している。

*4 近年若者間で「友達以上恋人未満」の意味で使われる流行言葉で、映画のタイトルにもなった。年長者の間では「愛人」と同義で使われることもある。

*5 モノレールと表現する在留日本人が多いが、一般的な二

条式鉄道である。

*6 大阪大学文学部の講義でこの作品を取り上げた際、映像をみた多くの学生たちが、例えばタイといえは(都会でも)象が出てくるといった自分の持っているイメージとの相違に驚いていた。

*7 3chでは都会風にアレンジされた正妻・愛人間のどろどろの愛憎物語、7chでは田舎風の派手なアクションの喧嘩好きメロドラマといった感じで趣向は分かれるものの、「ナムナオ」の系譜は現在でもテレビドラマ番組に大いに引き継がれている。

*8 ここに至る下地として『フェーンチャン・僕の恋人』(二〇〇三)、『早春賦』(二〇〇六)、『ミウの歌 Love of Siam』(二〇〇七)、のようにしっとり落ち着いた叙情あふれる作風の映画の存在が挙げられようが、いずれも子ども(小学生・高校生)を主人公としている。

*9 かつて「pop 風」が人気を誇っていた頃は、日本のファッション雑誌を小脇に抱え、気の利いた Japanese Restaurant で恋人と食事することがお洒落の最前線であり、また当時の若者のメッカ、サイアム・スクエアのセンターポインタが原宿を模して造られるなどした時代もあった(平松二〇一〇・二二)。

*10 トータル(歴代)では同じGTH制作の『スカイトレイン』(二〇〇九年度興行収入一位)に及ばなかった。

*11 今回本稿で取り上げたような映画のヒロイン像を、往年の映画の——たとえば「いじめられることがあっても最後には善がすべてに打ち勝つ」といった美德のある女性の理想

語、⑥未公開。

『絵の裏』……①^๑จิตรกรรม / Behind the Painting、②チュート・ソンシー、③二〇〇一年、④タイ、⑤タイ語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇〇一）。

『三〇+ 独身 On Sale』……①30+ 1st On Sale、②プティッポン・プロムサーカ・ナ・サコンナコン、③二〇〇一年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開。

『三〇はイケてる』……①30 ก้าวไกล / Fabulous 30、②ソムチン・シースパーブ、③二〇〇一年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開。

『早春賦』……①Seasons Change、②ニティワット・タラートー、③二〇〇六年、④タイ、⑤タイ語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇〇七）。

『チャン・ダーラー 前編』……①^๑รุ่นเก่า ลุ่มหลง、②バンテール・ワノップ・テークワン、③二〇一二年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開。

『天地果てるまじ』……①^๑ฟ้าทะลุนรก / Eternity、②バンテール・ワノップ・テークワン、③二〇一〇年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開。

『夏休み ハートはドキドキ』……①^๑Flamboyant รักวัยรุ่น / Hormones、②ノンヨット・スックマークアナ、③二〇〇八年、④タイ、⑤タイ語、⑥アジア海洋映画祭（二〇〇八）。

『七年七色の恋』……①^๑รัก 7 ปี 7 สี / Seven Something、②パ Weiner・プリーチットパンヤー、アディソン・トリリーシ・リカセーム、チラ・マリクン、③二〇一二年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開。

『ファームアンの洞窟』……①^๑ถ้ำผาผึ้ง / The Outrage、②バンテール・ワノップ・テークワン、③二〇一一年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開。

『フェート（双生児）』……①^๑ฟ้า / Alone、②バンジョン・ピサヤタナクーン、パークブーム・ウォンブーム、③二〇〇七年、④タイ、⑤タイ語、⑥未公開。

『フエンチャン（僕の恋人）』……①^๑แฟน / My Girl、②三六五フィルム（コムクリット・トリラーウイモン、ウイッタヤー・トーンユーン、ノンヨット・スックマークアナ、ニティワット・タラートーン、アディソン・トリリーシ・リカセーム、ウイッチャバット・コーチュウ）、③二〇〇三年、④タイ、⑤タイ語、⑥劇場公開（二〇〇五）、DVD販売。

『ブンミおじさんの森』……①^๑ลุงมือปืน (ブンミおじさん前世を思い出す) / Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives、②アビチャート・ボン・ウィーラセータクン、③二〇一〇年、④タイ、イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、⑤タイ語、⑥東京フィルメックス映画祭（二〇一〇）、劇場公開（二〇一一）、DVD販売。

『ミサの歌（Love of Siam）』……①^๑รักสยาม (サイアムの恋) / The Love of Siam、②チュエキアット・サックウィーラクン、③二〇〇七年、④タイ、⑤タイ語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇〇八）、大阪アジア映画祭（二〇〇九）、劇場公開（二〇〇九）、DVD販売。

『羅生門』……①^๑羅生門、②黒澤明、③一九五〇年、④日本、⑤日本語、⑥劇場公開（一九五〇）。

著者紹介

- ①氏名……平松秀樹（ひらまつ・ひでき）。
- ②所属・職名……大阪大学・チュラーロンコーン大学・非常勤講師、国際日本文化研究センター・共同研究員。
- ③生年・出身地……一九六八年、岡山県。
- ④専門分野・地域……タイ研究、比較文学・比較文化（タイ・日）。
- ⑤学歴……京都大学文学部、チュラーロンコーン大学大学院比較文学科・修士課程（比較文学専攻）、大阪大学大学院文学研究科・博士課程（比較文学専攻）。
- ⑥職歴……大阪大学外国語学部（旧大阪外国語大学）・文学部・非常勤講師（三六歳〜現在）、チュラーロンコーン大学文学部・専任講師・非常勤講師（三九歳〜現在）。
- ⑦現地滞在経験……タイ・タイの僧院にて出家修行・僧籍（二七歳、二年間）、大学院留学（二九歳、四年）、チュラーロンコーン大学講師（専任・非常勤、三九歳、五年）。
- ⑧研究手法……仏道修行（瞑想・パリー語・仏教教理）の経験がタイ文学・文化を理解する上での根幹となっている。
- ⑨所属学会……日本比較文学会、国際比較文学会、日本タイ学会。
- ⑩研究上の画期……一九九三年の日本でのコメ不足。日本が冷害による米不足で急遽タイから緊急輸入を要請した経緯にもかかわらず、あまりにもタイ米の悪口（ほとんど挨拶がわりのように）を述べる日本人が多かった。日本人の他のアジアをとらえる「まなざし」に疑問を感じた。
- ⑪推薦図書……佐々木英昭編『異文化への視線——新しい比較

文学のために』（名古屋大学出版会、一九九六年）、稲賀繁美編『異文化倫理の理解にむけて』（名古屋大学出版会、二〇〇〇年）。テキストとして（前者、実践として（後者）、異文化と接する際の「心構え」を示していて有益。

⑫推薦する映画作品……『ミカド』（原題『The Mikado』、ヴィクター・シャーンツィンガー監督、一九三九年、イギリス）。ここにみられるような西洋人のまなざしを日本人が東南アジアを見つめる際の「他山の石」としたい。